

[課題演習概要]

音楽科における鑑賞の充実
—自己の感じとったことを表現するための手立て—田 中 亜 耶 佳
Ayaka TANAKA福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
教職教育高度実践力プログラム

(2024年1月10日受理)

キーワード：鑑賞、音楽を形づくっている要素、音楽の言語化、想像、創造、自己表現、対話

1 研究の目的

未来の教育のありようを示した「OECD Future of Education and Skills 2030」（和訳「OECD Education 2023 プロジェクトについて」）では、2030年に向けた学習の枠組みの方向性を示している。本研究では、ここに示されている力の一つである「新たな価値を創造する力」に着目する。なぜならこれは、従来の枠組みにとらわれず、新たな生活様式や、社会モデルを開発して2030年に備える力と考えるからである。こうしたOECDの指摘は、フロム（1977）の「自己の喪失」（『自由からの逃走』）と重なる。「自己」とは自分の考え・主張を持つことであり、自己を表現することが必要である。

しかしながら、現実の学習場面ではそれらが実現できているとは言い難い。例えば音楽の鑑賞の際、自己の感じたことに自信がなかったり、何も感じなかったりして、答えはないかと教科書を開く生徒たちが存在する。それは決して少数ではない。その原因の一つには、どのように聴いたらよいか分からないつまり、聴き方をサポートするための知識（「音楽を形づくっている要素」）の不足がある。

そこで本研究では、音楽科における鑑賞の充実に向けた手立てを追究する。具体的には、(1)「音楽を形づくっている要素」を理解し、(2)それを聴きとり、(3)自己のイメージや感情、音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けて聴くことに向けた3過程を考案し実践を行う。本研究では鑑賞に着目し、創造性や自己表現の力を育む手助けとなるようなツールや授業案を作成する。

なお、本研究の詳細は以下の論文に記載している。田中亜耶佳「音楽科における鑑賞の充実—自己の感じとったことを表現するための手立て—」（2024 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報 14号）

2 研究の計画

本研究は、文献研究と実践の考察で行う。研究計画は以下の通りで、本稿では、M2 後期の研究について主に述べる。

M1 前期	自己表現ができる環境づくりと授業についての文献研究を行う。
M1 後期	曲を聴いて感じたことを表現するための手立ての研究と授業実践を行う。
M2 前期	生徒の音楽の聴き方の分析をし、音楽の聴き方の幅を広げるための授業案を提案・実践する。
M2 後期	様々な音楽の聴き方をし、一人一人が聴き方の幅を広げるための手立てや授業案を提案・実践する。

3 研究の内容

(1) 音楽科における鑑賞について

音楽科の鑑賞の学習については、「音楽によって喚起されたイメージや感情などを、言葉で言い表したり書き表したりして音楽を評価するなどの能動的な学習において成立する」と記述されている（『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編』）。これらから音楽科における鑑賞を捉え直すと、鑑賞とは、曲を聴き、自分なりに曲を感じ【想像】、曲について自分なりに評価し自己表現する【創造】ことである。これはつまり、「音楽を形づくっている要素」のいずれかが作用し、生徒の中に【曲に触発されて

思い起こす風景や色などの経験を想起する】という【想像】が生じることである。そして想像したことを踏まえて、【曲について自己の感じたことを自己の持っている言葉で表現する】という自己表現としての【創造】が生まれる。さらに、これらが他者と共有されることによって、自分の特徴を知ることができたり、聴き方の幅を広げたりすることが可能になる。これが、「新たな価値の創造」である。

(2)「音楽を形づくっている要素」について

「音楽を形づくっている要素」とは、音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成の8つの要素ことであり、音楽はこれらの要素によって形づくっている。また、これらの要素は総合的かつ複雑に関わり合いながら音楽としての全体を成していると考えられる。

要素の聴きとりの現状は、1つの要素に着目している生徒がほとんどであり、聴きとる要素に偏りがあることが捉えられる。この偏りは、鑑賞とそれを自己の言葉で表現する自己表現の充実にも影響を与える。そこで、感じとる幅を広げるために、「音楽を形づくっている要素」についての学習を行うことにした。

(3)鑑賞・自己表現を充実させるための工夫

①語彙ブックの作成と活用

語彙ブックは、音楽を聴く際に手助けとなるツールとして作成した。具体的には、音楽のどこを聴けばよいか分からない生徒に対して、聴くポイントの焦点化が可能になるものである。語彙ブックは、音楽の印象を表す言葉と音楽を形づくっている要素ごとに特徴をまとめたものの2つで成り立っている。要素ごとの特徴については、「イメージ」と「質感・特徴」の2段階でまとめている。これは要素を捉える際に、まず音の「イメージ」をもち、次に「特徴」を捉え、なぜその「イメージ」をもったのかを「特徴」をもとに分析する必要があると考えたためである。例えば強弱である。だんだん自分に何かが迫ってきているよう（イメージ）と感じたとならば、楽器の音がだんだん強くなっているからだ（特徴）というようにイメージと要素の特徴を結び付けることである。こうした語彙ブックの効果として、次の3点が挙げられると考えられる。・イメージと要素の特徴を結び付けることで曲中の要素の工夫の意味を理解しやすくなる ・要素に着目することで、曲の特徴を捉えやすくなる ・語彙ブックを用いることで、自分の感じたことを言葉で表現する支援や、新た

な視点の獲得に繋がりやすくなる。実際に生徒の中には、語彙ブックを「自分の中の視点を増やす」や「自分の感情や感覚を表す」と捉えている人もいた。

②教材の作成

実践授業では、耳を使って聴く（聴覚）だけでなく、布の触り心地の質感（触覚）で音色を捉える時間を設定した。布を用いる理由については、聴覚だけでなく、触覚を使用することで音色の質感を捉えやすくと考えたためである。実際に使用した布は9種類で、これらの布を1枚の画用紙に貼りつけた。布を用いて音色を聴きとることで、ペロアの生地質感から「高級っぽい」と捉えている生徒もいた。生徒の感想には、「布を使って、音楽を聴くことでイメージがしやすくなった。色々な感じ方があって、新たな発見ができた」というものもあった。これらから、布を用いて触覚に働きかけることで新たな自己を発見し、自己表現するための手助けになるということが言えるのではないかと考える。

4 成果（○）と課題（●）

本研究の成果と課題は次の通りである。

- 「音楽を形づくっている要素」の学習を丁寧に行うことで、聴きとりの視点を増やす。
- 語彙ブックや布の教材を用いることで、自分の感じたことを言葉で表現する支援や、新たな視点の獲得に繋がる。
- 単発の授業ではなく、年間で継続して行う必要がある。
- 生徒一人一人の聴きとる要素は、事前調査をもとに教員側で決めたが、生徒が自由に選択できる場の設定を行う必要がある。
- 鑑賞だけでなく、表現などの音楽全般で自己表現の充実を図る必要がある。

主な引用・参考文献

- OECD「OECD Future of Education and Skills 2030」和訳「OECD Education 2023 プロジェクトについて」秋田他 p.6
- E・フロム（1977）『自由からの逃走』pp.203-204（日高六郎訳東京創元社 72 版）
- 文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領（平成30 年告示）解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編』p.47 教育図書株式会社